

ラーニング・コモンズ

会誌編集部

I. はじめに

ラーニング・コモンズは、病院図書館員には浸透していないかもしれないが、大学図書館ではそれなりに大きな影響がある。ともすればこれまでの図書館のあり方が大きく変わってしまうかもしれない。一方で、「言葉はパッと広がったが実態はよくわからない、『ラーニング・コモンズ』には、そんな先物買い感が漂っている¹⁾」確かに見学に行ってみると、おしゃれで見通しのいいフロアにテーブルが置いてあり、学生はそこでは自由に話をしていいし、PCや周辺機器も貸してくれるとのこと、場所によっては飲食も許される。図書館の中に出現したその新奇な空間に驚きながら、自分のところの図書館での実現性を探ると同時に、一方ではそれほど大層なことでない気もしている。今回はラーニング・コモンズについて考えてみたい。

II. ラーニング・コモンズって何？

以下は伝統的な大学図書館とラーニング・コモンズの対比である²⁾。

	伝統的図書館	ラーニング・コモンズ
学習モデル	伝統的学習モデル	構成主義的学習モデル
学習スタイル	個別学習	グループ学習
雰囲気	静か	騒がしい、活気がある
支援スタッフ	図書館員などの図書館スタッフ	図書館スタッフ+学生アシスタント、他部署との連携に基づいた他部署のスタッフ
飲食	不可	カフェの設置、閲覧室への飲物の制限的持込可

まず「ラーニング・コモンズ」という言葉を聞いても、それが何か直観的にわからない。

コモンズというのは端的に言えば共有地です。そこにあるものはお互いに使えるというものです。ヨーロッパにおいても日本においてもコモンズは、そのような意味（日本ではたとえば入会地を想起してください）であったと思います。また、ヨーロッパの人々がアメリカに渡ってニューイングランドにコモンズというものを作りました。ボストン・コモンズというのが有名なのですが、あのコモンズは真ん中に芝生のある、公園みたいなもので、そこは人々が寄り合って話し合いをする場所でした。コモンズにはそのような意味もあります³⁾。

ではラーニング・コモンズとはどういうところか。インフォメーション/ラーニング・コモンズが備えるべきものとして、米澤⁴⁾は以下をあげている。

1. 図書館が有する各種情報資源を活用し、長時間リラックスして学習ができる。
2. 個人的なスペースのほか、グループ学習できるスペースがあり、プレゼンも可能である。
3. レファレンスサービスや各種講習会などの情報リテラシー支援を受けることができる。
4. スキャナー、プリンタ、マルチメディア編集などの設備が利用可能である。

5. コンピュータ設備についての技術的支援を受けることができる

三角¹⁾は米澤⁵⁾を引用し、ラーニング・コモンズを一言で言っている。

米澤 (2006) では、図書館に今後、求められるものとして、下記を挙げている。

- ・移動可能なパーティションなどによるフレキシブルな空間
- ・グループ学習室、グループ・ワークステーション、プレゼンテーション室などの共同作業向きの場所
- ・カフェやラウンジなどの社交的な施設

ほくはこれを複数でワイワイと学習できるスペース！と言い換えている。

Ⅲ. ラーニング・コモンズの歴史

ラーニング・コモンズの歴史について、見てみたい^{2, 5, 6)}。

北米で1980年より、「インフォメーション・コモンズ」という言葉が使われはじめる。インフォメーション・コモンズの最初の計画は、1987/1988年のミシガン州ジャクソン・コミュニティ・カレッジで、実際に大学図書館に設置されたのは1990年代以降である。2004年のARL(北米研究図書館協会)の調査で、回答館74館のうち、30パーセントにあたる22館が設置していた。米澤⁶⁾によると、インフォメーション・コモンズは、インターネットの発達に対する図書館の存続への問題意識、入館者数や貸出数減少への危機感に対する解決策として出されたものであり、いくつかの事例報告によるとそれぞれの図書館への導入後、入館者数を増加させたとある。

「ラーニング・コモンズ」への転換は、2005年4月にミネアポリスで開催された第12回ACRL全国会議で、「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ」というセッションが行われている。その開催趣旨が、「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへの転換は、学部教育の新たなパラダイム転換、すなわち学習理論が『知識の伝達』から『知識の創出・自主学习』に移行したことを反映したものである⁵⁾」。

日本におけるラーニング・コモンズは、国際基督教大学図書館が2000年1月、お茶の水女子大学附属図書館が2007年4月、東京女子大学図書館が2008年4月に開始した。その他雑誌の事例報告などで見られる導入校は、筑波大学・大阪大学・横浜国立大学・新潟大学・湘北短期大学などがある。

Ⅳ. ラーニング・コモンズの定義

すでに文中にも出てきているが、インフォメーション・コモンズという言葉があり、ラーニング・コモンズと対比される。ラーニング・コモンズに関する図書として非常によくあげられる、D. Beagleらの“The information commons handbook”で、それらの定義がなされている。

- ・(インフォメーション・コモンズは、) 学習支援のために組織された物理的で、デジタルな、人的かつ社会的な資源を関連付けた、ネットワーク・アクセス・ポイントと、関連する情報通信技術ツールの集合体²⁾
- ・インフォメーションコモンズにおけるリソースが、アカデミックユニット(注: 学部や学科など教育活動の主体)によって設定された学習目的や、図書館とアカデミックユニットとの協同的なプロセスによって設定された学習成果との関連において組織されているときに、それをラーニングコモンズと定義する⁷⁾
- ・インフォメーションコモンズは大学のミッション(教育目標)を支援する⁷⁾
- ・ラーニングコモンズは大学のミッション(教育目標)を決定する⁷⁾

なかなか頭にすんなり入ってこない文章であるが、それは翻訳文のためだけでなく、ラーニング・コ

モンズというのはかなり理論的なものなのである。以下の文章をご一読いただくと、もう少しわかりやすいかと思う。

海外(主としてアメリカ)の文献では、両者(著者注:インフォメーション・コモنزとラーニング・コモنز)の違いがその本質に関わるものだとする議論があり、その呼称にもこだわる考えもある。しかしそれは彼の地での、1990年代以降現在までのインフォメーション/ラーニング・コモنزの歴史と発達段階を経て、初めて生じてきたものと思われる。従って、まだこの分野の歴史と実践が十分とは言えないわが国で、いたずらに言葉の定義や本質論に拘る実益は低いと考え、本論稿では、(中略)学生が必要とする人的支援を備え、学生の主体的な学習活動を重視した「インフォメーション・コモنز」を「ラーニング・コモنز」と考える⁹⁾。

英語圏諸国では、この2種類の「コモنز=共有空間」が相前後して誕生し、現在でも並行して存在しているため、両者を峻別することは難しいのである。時系列的には、インフォメーションコモنزの成立が早く、その発展形としてラーニングコモنزが存在する。一言でいうならばインフォメーションコモنزは「情報化に対応した図書館」であり、ラーニングコモنزは「学習に役立つ図書館」とすればわかりやすいだろう⁷⁾。

V. 日本におけるラーニング・コモنزの現状

日本におけるラーニング・コモنزについての事例報告から、現状や効果として主なものをあげてみる。

1. 横浜国立大学中央図書館⁸⁾

- (1) 「学習の場所」としての役割が中心である。
- (2) 個人学習者と、グループ学習者がいて、それぞれの学習形態にあった場所の提供が必要である。
- (3) 個人学習者は、集中して静かに学習できる場所を求めている。
- (4) グループ学習者は、話し合いによる学習効果で、学習意欲を高めている。
- (5) 学習目的でない学生は、飲食・休憩・雑談など、非常に幅広い用途で図書館を利用している。
- (6) 図書館備え付けPCの利用率が高い。
- (7) PCと図書館資料の両者を利用した、図書館のメリットを生かしたPC利用行動がある。
- (8) 図書館のイメージは良い。よく利用する学生ほど、好イメージを持っている。
- (9) 図書館職員の役割の重要性は認識していない。

2. お茶の水女子大学附属図書館⁹⁾

- (1) 2006年と比較して2008年入館者数約50%増加。
- (2) 定時観測で92%のPCが利用されていた。
- (3) 「資料のある場所」から「教育の場」へ教員の意識が変化し、大学の教育改革の場に図書館が選ばれている。

3. 東京女子大学図書館⁹⁾

- (1) 入館者数が累計(2008年4月から半年)前年度比約31.1%増加。
- (2) 館外貸出冊数が(4月から半年)前年度比約6.8%増加。

4. 国際基督教大学図書館⁹⁾

- (1) 入館者数が増加。1990年代に25万人前後の年間入館者数が、2000年には30万人を突破。その後35万人前後で推移。
- (2) 一人当たりの年間館外貸出冊数の増加:過去10年(2003年まで)で1.5倍(45冊→65冊)に

(一人当たりの貸出冊数の大学平均は8冊)。

VI. 考 察

日本におけるラーニング・コモンズの導入事例を見てみると、利用者増という目的は果たしている。インターネットの発達や図書館資料の電子化による利用者の減少、そして利用者とのコミュニケーションをもつ機会の減少を実感している者にとって、図書館という場を今後どうしていくかについて、ひとつの光明を見出すことができる。

(ラーニング・コモンズは) 簡単にいえば、学習の場としての大学図書館を象徴する施設モデルであり、電子ジャーナルに代表される電子的な学術情報資源の普及により起こった「図書館不要論」や入館者の減少という大学図書館の危機に対する図書館側からの解決提言とも言える¹⁰⁾。

一方でそもそもこれがそんなに特別で新しいことなのかという気もしないでもない。三角は以下のように言っている。

それでまあ6月のCSI報告交流会の帰りに先行のO大図書館にラーニングコモンズ視察に行ってきたわけだ。感想は一言で言うと「えっ?!」拍子抜けした。こう書くと語弊を招く可能性が極めて高いが、あえて書くと、「ラーニング・コモンズ」と名づけられたスペースには新しさを感じなかった。どこと比べてかと言うと、前の前の職場のY大工学部図書館だ。2005年時点で利用者用PCが60台、課金プリンターもスキャナもあって、常時ではないが大学院TAも勤務。閲覧席の大半に情報コンセント、無線LANも提供。こう書くと自慢みたいだが、僕が導入したんでない。今にして思うと、あれはラーニング・コモンズだったのか? そう考えると既にラーニング・コモンズのサービスを提供してる図書館は幾つもあり浮かぶし、他にも多数あるのでは? 名前をつけるのは重要だ、目標の明確化につながる。既存サービスを整理して思いきって宣言してしまうのも手か?¹⁾

欧米と日本の大学教育を取り巻く環境や文化が異なるとしても、ラーニング・コモンズは、すぐれて理論的な話で、その効果的な利用とその結果としての学習効果の向上とが意識的に結びつかなければならない。そのためには、定義のところで「ラーニングコモンズは大学のミッション(教育目標)を決定する」とあったように、学校全体として主体的に取り組んでいく必要がある。そうでなければ、それは極端な話無料のネットカフェであり、便利で利用者が増えようとも、そして現状においてたまたま学生が好ましい利用を行っていたとしても、ラーニング・コモンズがめざすところとは隔たりがあると思われる。永田は以下のように警告している。

今、一応名前だけはラーニング・コモンズという名前になっている部屋があって、そのラーニング・アドバイザーみたいなことをやっていますが、実際にここに来てやらなければいけないような学習をそんなにしなくてはならない状況に、今、自分の大学があるのかというのが気になっています。実際にたくさんの難しいレポートをやっていることもあるけれど、そうでなければ、そもそも普段そんなに学習をする機会というか、そこまで一生懸命根づめないといけない課題なんてないのが現実だったりして(笑)。それなのに、作っても、よく使われているのだけれど、何に使われているのかわからないということがあるのではないかと。本当にそれが教育効果を高めることになっているのかということが、若干気になっている¹¹⁾。

学生の学習成果をいかに高めるのかということを実面目に考えないといけない。単なる寄り合いの場所で終わってしまうよという点です。欧米で出てきたインフォメーション・コモンズとかラーニング・コモンズと我々がやっていることは似て非なるものではないか、そうなりかねないですよ

という警告をしたつもりなのです³⁾。

引用文献

- 1) 三角太郎：ラーニング・コモンズは荒野をめざす？. 大学の図書館. 2008；27(8)：166-8.
- 2) 呑海沙織, 溝上智恵子：大学図書館における学習支援空間の変化：北米の学習図書館からラーニング・コモンズへ. 図書館界. 2011；63(1)：2-15.
- 3) 永田治樹. インフォメーション・コモンズ ラーニング・コモンズ. 大学図書館問題研究会出版部編. ラーニング・コモンズ：学びの場の新しいカタチ (大図研シリーズ：25). 東京：大学図書館問題研究会出版部；2009. p.1-18.
- 4) 米澤誠：学習意欲を高める図書館サービス. 大学時報. 2007；56(315)：38-41.
- 5) 米澤誠：インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス. 2006；289：9-12.
- 6) 永田治樹：大学図書館における新しい「場」インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008；7：3-14.
- 7) 河西由美子. 自律と協同の学びを支える図書館. 山内祐平編著：学びの空間が大学を変える. 東京：ポイックス；2010. p.102-27.
- 8) 立石亜紀子：ラーニング・コモンズと横浜国立大学中央図書館：これまでとこれから. LISN. 2010；144：6-10.
- 9) 上田直人, 長谷川豊祐：わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズの事例研究. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008；7：47-62.
- 10) 茂出木理子：ラーニング・コモンズの可能性：魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ. 情報の科学と技術. 2008；58(7)：341-6.
- 11) 小野亘司会. 質疑応答. 大学図書館問題研究会出版部編. ラーニング・コモンズ：学びの場の新しいカタチ (大図研シリーズ：25). 東京：大学図書館問題研究会出版部；2009. p.62-78.

(文責：増田 徹／藍野大学中央図書館)